

将来への危機感が熱望させた

2006年11月3日から高岡市美術館で「工芸都市高岡クラフトコンペ20回記念展」が開催された。回顧展では、第1回から第20回までのグランプリ受賞作品などを一堂に展示。20年を一日で見渡せる空間となっていた。時を経ても、変わらない輝きを放つ作品たち。これらの陰には、多くの人々の熱意と活動がある。

今から約20年前、高岡の伝統工芸品の販売額は順調に伸びていた。しかし、業界の若手の中には将来への危機感があった。「今と同じものをつくっては将来は厳しい。何とか新しい方向性を見出したい」「ものを売るだけではなく、伝統工芸のまち高岡の知名度を上げなければ」。そこで、「クラフトの全国公募展」という案が動き出すことになる。高岡市のデザイン青年会を中心となって、行政を動かす。また、他のクラフトコンペとの差別化を図るために、高岡独自のスタイルを模索した。審査員は、ジャンルにとらわれずさまざまな分野から一流の方々を迎える、素材を銅器や漆器に限定せず幅広く求める募集作品は追加製作可能なものであり、アート、美術品を除くなどの方針が決められた。

第1回の審査員をお願いした内藤正光さん(工芸評論家)、荻野克彦さん(デザイナー)

さまざまなもの実

ロダクトデザイナー)などのアドバイスを受けて準備を進め、応募要項などを発送。同時に、市内の企業には協賛を依頼した。

「クラフト」といっても、わかつてもらえない。工芸品とどう違うんだと言われましたね」と、クラフトコンペ事務局である高岡商工会議所の中山晃さんは語る。多くの人々による手探りの準備。その結果は、応募総数1162点。成功の目安といわれる1000点を超える好スタートとなった。

第1回クラフト展は、開学したばかりの国立高岡短期大学現・富山大学芸術文化学部のエントランスホールで行われた。開催前、クラフトを理解してもらえたかった人にも、会場を訪れてもらつた。見てもうことで、理解者は増えていった。

社会では、使い捨てカメラやレンタルビデオなどの便利商品や、財テク関連商品がヒットしていた。そんな時代に、ものづくりのまち高岡のクラフトコンペは始まったのである。

「工芸都市高岡クラフトコンペ 20回記念展」

- 2006年11月3日(金)~12日(日)
- 高岡市美術館
- 「20回記念回顧展
(過去のグランプリ作品等を展示・紹介)」
- 「過去の審査員の招待出品展」
- 「写真等による20年の足跡紹介」



第8回グランプリ「網目プレート」嶋田数男



第20回グランプリ「回天」青山幸雄



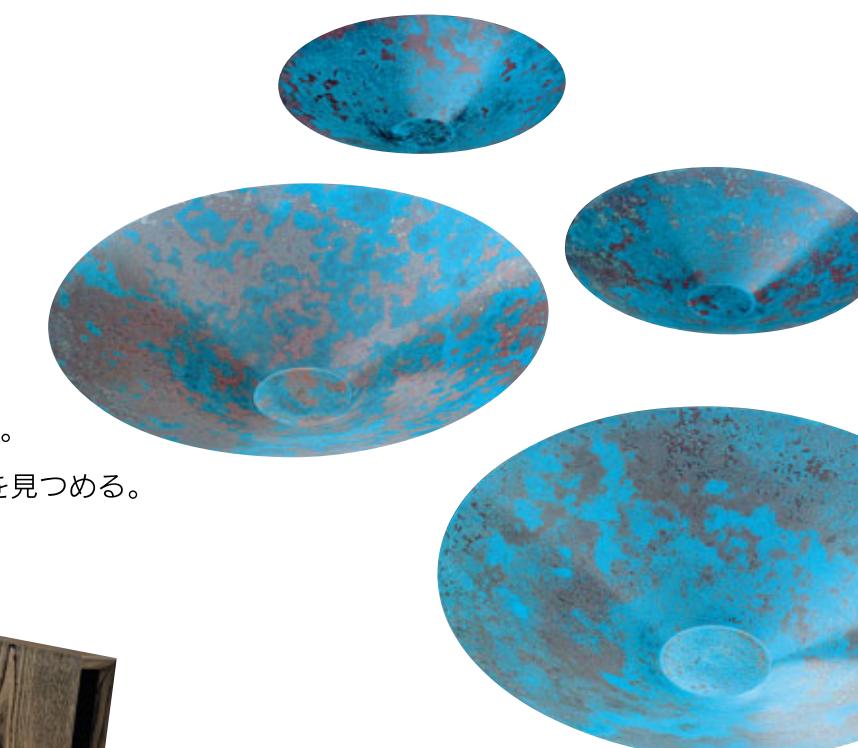
'91 第6回 金賞
「朱塗合子」黒田昌吾

20回記念 工芸都市高岡クラフトコンペ デザイン工芸都市 高岡の 20年と今

「工芸都市高岡クラフトコンペ」は、2006年に記念すべき20回目を迎えた。約400年の歴史を誇る伝統工芸のまちが、クラフトをキーワードに、全国屈指のコンペを育ててきた20年。何をもって始まり、どこへ行こうとしているのか。その軌跡のなかに、ものづくりのまち高岡の今を見つめる。



'01 第15回 グランプリ
「MODERN」下尾和彦



'91 第6回 グランプリ
「蒼茫」相川繁隆



第15回メタルクラフト賞
「パーティプレート&トレー」炭谷政孝



第18回生活者が選ぶクラフト賞
「匹で数える器」青木有理子

クラフトコンペの見直しと再出発

成を受けて開設したもので、市街地の活性化とクラフト情報の発信を目指した。1階はクラフトコンペの入選作家の作品を中心としたショップ、2階は作品発表の場としてのギャラリーを設置。好きな作家の作品が常時入手でき、新しいクラフトファンを生み出した。

そのような成果がありながら、第13回を終えた時点で、高岡クラフトコンペは見直しが図られる。

1991年のバブル経済の崩壊とともに経済状況は厳しくなり、高岡の伝統工芸品の販売額も1991年をピークに減少していた。社会では、大型銀行の再編が相次ぎ、低価格で質のいい商品やサービスが人気を集めている。

高岡クラフトコンペの開催目的には、高岡の産業界の活性化がある。コンペとしては国内屈指の規模と実績を誇る

ようになっていたが、産業界に対する効果は疑問視する見方が多かった。

そこで、1999年の開催を見送り、1年間議論が交わされた。その結果、クラフトコンペは開催すべきであるという結論に達し、継続を決定。賞の内容などに工夫がこらされた。

1995年には、東京六本木のAXISビル内に、「XPORT」がオープンする。これは、「株式会社ニュース・インターナショナル」とクラフトコンペに限定せず、個々の企業の商品開発に審査員とのつながりが生かされていくようになった。

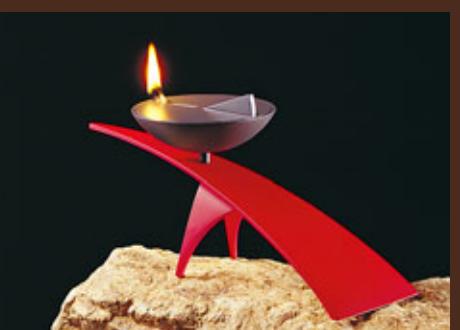
まず、地場の素材にこだわり、メタルクラフト賞、漆クラフト賞が新設された。選ばれた2作品は、それぞれ銅器・漆器の新たな可能性を示唆するものである。

また、来場者の投票によって決定する「生活者が選ぶクラフト賞」も実施され、従来にはなかった視点でクラフトと産業の新しい可能性を模索するものとなつた。

クラフト展の開催スタイルも一新し、高岡文化ホールから市中心市街地へと移行。メイン会場の他にサテライト会場を設置し、回遊性のある展示で「クラフトの街高岡」をアピールするものとした。



第11回奨励賞
「器I・II・III」内島正雄



「トーミヨー」
岩井庸之介×(株)ニュース・インターナショナル



(上)「X:PORT」(六本木AXISビル)
(左)高岡クラフトショップ「FORM」

の審査員であるテキスタイルデザイナーの粟辻博さんを迎えて、漆器の新しい可能性に挑んだ。「カタチをつくらないサンフェス(表面)」というコンセプトで、商品開発に関わる人々にヒントを発信していくという試みである。塗りの新しい技法とテクスチャを大きなボードにして、1990年に東京六本木AX

「インターナショナル」とクロックメーカー「タカタレムノス」が、首都圏における情報受発信拠点として開設したショールームである。多くのメディアやデザイン関係者が訪れ、新たなビジネスチャンスをつくりだした。

一方高岡では、1996年に中心商店街に高岡クラフトショップ「FORM」がオープン。高岡商工会議所が国の助

「タカタレムノス」が、首都圏における情報受発信拠点として開設したショールームである。多くのメディアやデザイン関係者が訪れ、新たなビジネスチャンスをつくりだした。

「ARC」黒川雅之×(株)竹中製作所



第1回グランプリ
「パーティの器」町田俊一

記念すべき20回を迎えて

第20回の高岡クラフトコンペは、第1回の審査員を務めた荻野克彦さんを審査委員長に、第1回のグランプリ受賞者の町田俊一さんを審査員に迎え、7名で審査が行なわれた。



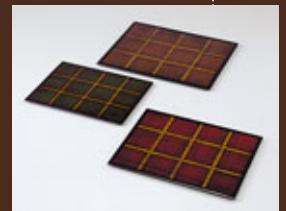
第19回グランプリ
「Bijoux」青木良太



第16回銀賞
「飾台」下尾さおり



第12回グランプリ
「花器」金子透



第8回奨励賞
「ペアランチョンマット(紬)」畠勝日佐



第6回奨励賞
「花器」(株)織田幸銅器

市制100年記念特別賞
東京展を新宿OZONEプラザで開催(~93)



第1回グランプリ
「パーティの器」町田俊一

審査員の伊東順二さん（富山大学芸術文化学部教授）は、「今までの高岡クラフトコンペの伝統を守りながら、今までになかつた未来を感じさせるような作品が出てきて、それが評価を受けたことがすばらしい」と語る。

また今回は、2002年に審査員を務め、2003年に亡くなった経済学者の蟻山昌一さん（旧高岡短期大学学長）のご遺族から支援の申し出があり、蟻山昌一特別賞を設置。一消費者の立場に立ちコストパフォーマンスを重視されていたことから、特別賞



第20回蟻山昌一特別賞
「Spicy Box～香箱～」石原亮太

は市民の幅広い層から審査員を選定し、5点が選ばれている。

この他、クラフト展同時開催としてグランプリ受賞者の最近の作品を展示する「その先のクラフトへ」など、多彩な展示会が開催され、新しいクラフトの未来を展望する試みが行われた。

工芸都市高岡を刺激し続ける

クラフトの概念が理解されなかった時代から20年。新しいクラフト作品は、高岡だけでなく全国のクラフトマンやクリエーターに刺激を与え続けてきた。また、2004年からの「タカオカクラフトウイーク」（スタンプラリー＆企画展）の実施など、常に新しい企画や試みの積み重ねが20回という歴史につながっているといえる。



工芸都市高岡2006クラフト展(大和高岡店)

つつある。

また、このコンペに

より、審査員を始めとする日本を代表するデザイナーたちに、工芸の技術集積地としての高岡を認識させ、お互いが触発された

という効果は大きい。
伝統工芸関係者には、

クラフトコンペは県内の新進作家たちにも、大きな成長の機会となっている。近年では、2003年に山田節子賞

を受賞した陶器の小杉かん子さん、2004年に鈴木真知子賞を受賞した金工の折井宏司さん、奨励賞を受賞したガラスの鶯塚貴紀さんなど、彼らは現在、さまざまに活動の場を広げ、ものづくりのまち高岡に新たな刺激を与えて

高岡市にとって、高岡クラフトコンペは単なる公募展ではない。全国からの作品にふれる機会、審査員とのつながりのなかから生まれる次のステージ、新しい才能の発見と彼らの力強いパワー、そして工芸都市高岡として高岡市民がクラフトを楽しみ、誇りに思う文化資産となっている。それが何よりの「工芸都市高岡」の発信なのである。

20年の時を経て、大量生産大量消費の社会から循環型社会への転換が求められるようになつた今、ものづくりはまた新たな展開を見せるかもしれない。高岡の産業界への波及効果という課題は常にあるが、高岡クラフトコンペが高岡市そして産業界に刺激を与え続け、これからも多くの可能性の種を持っていることは間違いない。

同時開催

「その先のクラフトへ」

- 2006年10月26日(木)～30日(月)
- 大和高岡店1階ホール

日本を代表するトップクラフトマン6名の最新作品を展示。



「方形のもの」「緑の多角形」畠山耕治

「語りかけるモノたち」

- 2006年10月26日(木)～30日(月)
- 高岡市中心商店街活性化センター「わろんが」

富山県を代表する実力派クラフトマン5名の作品を展示。

「LIVING CRAFTS」

- 2006年10月26日(木)～30日(月)
- クラフトショップ B'come

「暮らしの中のクラフト」をテーマに、県内の若手クラフトマンたちの作品を紹介。



「小鉢(えどシリーズ)」小杉かん子

「くらしに生きる伝統のかほり展」

- 2006年10月26日(木)～29日(日)
- ウイング・ウイング高岡

「団塊世代のギフト」をテーマに、携帯箸やしおりなどアイデアあふれる作品を制作。